

高志台の五十年



長岡工業高等専門学校五十周年記念誌

本校は全国の高等専門学校（高専）に先駆けて、高専制度創設一年前の昭和三十六年四月に前身である長岡工業短期大学として発足し、今年が五十周年の記念の年にあたります。この記念すべき年に校長として就任し、「ごあいさつ」をさせて頂くことは、誠に光栄なことと感謝するとともに身が引き締まる思いです。

本校では五十周年を記念する事業として、以前より高田孝次前校長を始めとする教職員が、短期大学の第一回の入学式が挙行された五十年前の六月一日に近い週末に当たる今年六月四日（土）に記念式典や講演会などを行う予定で準備を進めておりました。しかしながら、皆様ご存知のように、去る三月十一日に未曾有の大震災が東日本を襲い、多くの方々が亡くなられ、被災され、大変な苦難を強いられ、日本全体が深い悲しみに包まれています。私たちは、このような状況下で記念式典などを行うことは、必ずしも適切ではないとの判断から式典や講演会を延期することに致しました。今回の震災で亡くなられた方々にはお悔やみを申し上げるとともに、被災された方々には心からお見舞いを申し上げます。

五十周年記念誌につきましては、本校創設時からの五十年間を振り返り、多くの困難を乗り越えて日本の発展に貢献してきた本校の諸先輩方の功績を想い、今後卒業生、後援会の方々、教職員、将来の技術者が一丸となって日本復興への新たな一歩を踏み出すための一助となることを願い、敢えて今年発行することに致しました。

本記念誌は、本校を支えて下さっている方々からの祝辞に始まり、旧教職員、同窓生からの「長岡高専への熱きメッセージ」、「長岡高専五十年の歩み」、「長岡高専を支える各学科の歩み」から構成され、最後に五十年の歴史を示す資料が綴じ込まれています。「長岡高専五十年の歩み」では、本校設置までの経緯、「高志台」の名称の選定、新校舎の完成、十二倍を超える志願倍率、校歌の発表など創設時の大きな期待と熱気、新たな学科増設など希望にあふれた時代を経て、学園紛争、専攻科の設置、独立行政法人国立高等専門学校機構への統合、中越地震を乗り越え、JABEEの受審など新たな時代の流れに對

応してきたこと、この間、平成九年の第三十二回全国高専体育大会ではハンドボール、バレーボール、柔道の三種目優勝の長岡旋風を巻き起こし、また、平成十二年にはロボコン大賞受賞など、課外活動においても目覚ましい成果を上げてきたことなど、当時の人たちの想いや活動を通して本校の五十年間の歩みが手に取るように伝わってきます。また、本校設置に至るまでの長岡の歴史的背景に触れられており、長岡地域における本校の存在意義・役割を考える上で役立つことが記載されています。本校の設置は、東山油田の開発に始まる長岡地域の工業の発展を背景に、明治時代から長岡地域の人たちが長年抱えてきた工業系高等教育機関設置への強い願いから実現したことを感じ取ることが出来ます。長岡地域の歴史を振り返ると、本校が何故、全国の高専に先駆けること一年前に工業短期大学として発足したのか、当時の人々の想いが伝わってくるような気がしてきます。少し強引かも知れませんが、戊辰戦争以降長岡地域に根付いている「米百俵」の人材育成の精神を、長岡地域の工業の発展が技術者養成に向かわせたように思われます。このように考えれば、子供から大人になる大切な人格形成の時期に一貫教育によって技術を中心とした人間形成教育を行っている高専はまさにこの地に最もふさわしい高等教育機関であり、地域の歴史・文化に深く根ざした教育の場として本校が将来に渡って果たすべき役割は明確です。

「長岡高専への熱きメッセージ」では、「長岡高専五十年の歩み」の流れの中で、先輩方が各時代に何を感じ、どのように過ごしていたのか、楽しく振り返り多くの思い出を語って頂き、また、その後の人生において高専での経験がどのように活かされたかなど、大いに勇気づけられる沢山のメッセージが寄せられています。この記念誌から、本校が、これまで多くの優秀な人材を輩出してきたことを知り、また、私たちの果たすべき役割が、今後も優秀な技術者の養成に努め、「ものづくり日本」を担うことのできる人材を輩出することにあることを改めて強く感じる事ができます。日本の、この苦難の時にこそ、まさに私たちが必要としている応援のメッセージにあふれています。私たちは、活気に満ちた創設期、乗り越えてきた困難、諸先輩方の応援の言葉を心に刻み込むことによって、勇気を持って次の時代に踏み出すことができるような気がします。

優秀な技術者が第二次大戦後の日本の復興を支えてきたように、技術者の力なくして今回の大震災からの復興をなし得ることは出来ません。日本が早く元氣を取り戻し、復興に向けて大きく動き出すようにとの願いを込めて、そして長岡高専が少しでも日本の復興・発展に貢献し、本校を応援して下さいる方々全ての期待に必ずや応えるとの決意を込めて、発行の「挨拶」といたします。



祝 辞

第六代校長

岡本祥一

創立から半世紀、長岡高専が創立五十周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

五十年を遡った当時の我が国の情勢を顧みますと、戦後復興の機運が熱を帯び、欧米各国に追いつけ追い越せを標語に、産官学が一体となって努力していた時代でありました。欧米の最新技術を学びとりこれを発展させる以外に道は無いとの認識に立った産業界の強い要請で、中堅技術者人材育成を目標に昭和三十七年度に高専制度が創立されました。我が長岡高専は制度発足と共に最初に一期校として発足、以来八千名の技術者を送りだしてまいりました。これから技術者は産業現場の中心となつて我が国の工業発展を支えている実績があります。我が国の重要課題である技術立国に大きく貢献してきた長岡高専に対し一人の国民として心からの感謝を申し上げますと共に今後の飛躍、発展を大いに期待する次第であります。

時代は変わりました。今や技術レベルは高度化し、我が国は欧米を追い越す先端技術開発に取り組む時代となつております。創造性が要求される時代であります。高専制度も中堅技術者養成から更に高度の技術者養成機関への発展が迫られています。そのため高専卒業者を主として取り込み指導的立場に立てる技術者を育成する目的で、技術科学

大学が昭和五十一年長岡と豊橋に開学しました。更に平成四年度には高度技術者養成のため高専制度に専攻科導入が決まり、平成十二年度に我が校にも導入されました。以来十年を経過、格段に科学技術教育の高度化が進み、優れた高度技術者を多数送り出す実績を挙げております。

長岡では「米百俵」の精神から、教育に極めて熱心な風土があります。とりわけ工業技術教育への関心が強く、大正十二年には長岡高等工業学校を設立、時代の変遷にあわせて長岡工業専門学校、更に昭和二十四年度の新潟大学設立に際し、工学部へと発展の努力を積み重ねてこられました。その後、昭和三十三年度頃から始まる実践的中堅技術者育成の社会的要請にあわせ官民を挙げて取り組み、昭和三十六年度には国立長岡工業短期大学の設立に成功、その後、工業短期大学を廃止する国の方針で現在の長岡高専となったいきさつは、存じの通りであります。現在はこの狭い町に大学、高専を含む高等教育機関が実に四校も展開しております。このような例は全国でも少ない素晴らしい教育王国と言えましょう。「米百俵」の精神を具体化し、長岡高専の設立に尽力された長岡市民の「恩に報いるためにも、優れた高度技術者の育成に努め、今後とも地域産業発展に大きく貢献されますよう心からお願い申し上げます。

祝 辞

前校長

高田孝次

本校の創立記念日について、初代校長の山崎貫三先生が『長岡高専二十年史』に寄せられた祝辞の冒頭で次のように記しておられます。「本校の前身である長岡工業短期大学が創設されたのは昭和三十六年四月であります。その第一回の入学式が行われたのはこの年の六月一日でありました。翌三十七年四月には本校が長岡工業高等専門学校として発足しましたが、短大の第一回入学式が行われた六月一日をもって本校の創立記念日と定めたのでした。……」

しかし学校誕生以来五十年、これまでに八千数百名に及ぶ卒業生・修了生が「高志台」から巣立ちました。後期中等教育を取り込んだ五年一貫教育によって高度な実践的技術者を養成するというユニークな高専教育システムは、歴代校長ならびに諸先生の優れたご識見とご尽力によつて、ことに所期の機能を発揮し、また、卒業生・修了生諸氏の弛まぬ努力は確実に成果を積み重ね、地域はもとより日本の工業技術分野から確固とした評価を得ておりますことは誠に喜ばしい限りです。そして今、大きな節目の年を迎えてここに『高志台の五十年』が編集・発行されましたことに、心からお祝いを申し上げるとともに、刊行に向けて真摯な努力を払われた関係各位に深い敬意を捧げます。

振り返りますと、私の在任中の平成十六年度に、全国の国立高専は独立行政法人国立高等専門学校機構の下に統一されました。新組織は学生数五万人超を擁する国内

最大級の国立高等技術教育機関となり、新たな歴史の一步を踏み出しました。また、平成二十年十二月には中央教育審議会において「高等専門学校教育の充実について―ものづくり技術の継承・発展とイノベーションの創出を目指して―」と題する答申が纏められました。そこでは、高専教育の今後の方向性として「中堅技術者の養成から、幅広い場で活躍する多様な実践的・創造的技術者の養成へ」と、教育内容を高度化・深化すべきことが明示され、各高専には変化する社会の要請に的確に応えるべく一層の努力が求められております。

このような変革の時期に高専教育に携わる機会を与えられ、私はその責務の重さを肝に銘じて微力ながら力のかぎりを尽くしてまいりました。ご協力、ご支援をいただいた教職員はじめ関係の皆様、改めて心から感謝申し上げます。

中越地震の困難を乗り越えた学生諸君の逞しい姿は今も鮮明に想い出されます。いっぽうで、誠に悲しく、残念なこともありました。私の不明・力不足のために多くの皆様に心配やご苦労をおかけしました。

長岡高専はこれらの経験から貴重な教訓をくみ取って今後、活かし、科学技術創造立国を担う人間性豊かな技術者の養成を使命としてさらに進歩・発展されることを信じております。この『高志台の五十年』がその一助として役立つことを願い、発刊の祝辞といたします。

祝 辞

同窓会長

伊藤恒彦

はじめに、この度の東日本大震災で亡くなられた方々並びに被災された方々に對しまして、心からお悔やみとお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧をお祈りいたします。

私も母校の長岡工業高等専門学校が本年創立五十周年を迎えられたことは誠に喜ばしく、記念事業実行委員会の皆様や関係者の方々に感謝申し上げますとともに心からお祝いを申し上げます。

母校の前身である長岡工業短期大学が創設されたのは昭和三十六年であり、翌三十七年には長岡工業高等専門学校として発足し、以来、幾多の変遷を経、この五十年の長い歴史と輝かしい伝統を築いてきております。

母校発足時の日本は高度成長期のまっただ中にあり、多くの企業が実践的科学技术者を求める中、機械工学科、電気工学科、工業化学科の三科で出発し、昭和四十三年に土木工学科が創設されました。その後、時代も二十世紀から二十一世紀に移るとともに、社会構造もよりグローバル化した社会となり、高専生に求められる科学技术者としての中身も変化してきました。そのため、母校においても社会が求めている人材の育成のため、各科の名称変更や専攻科の創設を行い、現在に至っております。

これまで八五〇〇人有余の卒業生を送り出し、県内及び国内はもとより海外を舞台に多くの同窓生が活躍しています。この同窓生の活躍が、長岡工業高等専門学校の名声を高めていることに對し心強さと誇りを強く感ずるものであります。

また、母校の礎を築いてこられた第一回からの卒業生をはじめ、歴代の校長先生や教職員、保護者さらには日頃見守りいただいた地域の方々の母校に對する情熱と真摯なご努力に對し、敬意と感謝を申し上げる次第であります。

このたび、半世紀となる五十周年を迎えるにあたり、母校に關する多くの方々の想いが結集され、後世に残せるような記念事業が進められます。現在、高志台で学ぶ皆さんも貴重な節目に在籍していたことはよい思い出になると思います。これまで築き上げられた長岡高専の輝かしい伝統を誇りにし、知識の取得、人間力の向上、仲間づくりに励み、すばらしい校風を築いてください。

最後に、長岡工業高等専門学校の将来への限らない発展と飛躍を祈念申し上げますとともに、創立五十周年記念事業に關する多くの方々に心から感謝を申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

平成二十二年度後援会長

酒井正春

独立行政法人長岡工業高等専門学校が、このたび創立五十周年を迎えられましたことを心からお祝いを申し上げます。

本校は、長岡工業短期大学として昭和三十六年に創立され、翌昭和三十七年四月に現在の長岡工業高等専門学校が設置され、以来五十年の歳月が過ぎ今日を迎えております。

現在、高等学校の教育は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて高等教育を施すとともに、自主的、主体的な態度で何事にも積極的に挑戦する学生、心豊かでたくましく、生き生きと学ぶ学生の育成を目指しておられると思います。その中で長岡高専におかれましては、「人類の未来をきりひらく、感性ゆたかで実践力のある創造的技術者の育成」を教育理念とし、七つの教育目標を掲げ、工学の専門知識と時代の要請に応えられる実践力のある技術者の育成をなされていることに対し、深く敬意を表するものであります。

さて、今日わが国では、平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災からの復旧・復興が最優先の課題として

取り組まれております。ここに、お亡くなりになられた方々にお悔やみを申し上げますとともに、被害に遭われた多くの皆様にお見舞いを申し上げます。また、その後の福島第一原発事故は、放射線の影響により地域住民をはじめ国民に大きな不安を与えており、周辺住民は避難所生活を余儀なくされ、児童生徒などの野外における活動が制限されております。東京電力には、多くの高専卒業者が勤務しており非常に心配をしているところではありますが、今こそ一致団結して、事態の早期収束に全力で取り組んでいただくことを願います。

在校生の皆様におかれましては、創立五十周年を迎えた年に、輝かしい伝統を持つ長岡工業高等専門学校に在籍したことを誇りにもつとともに、今の自分を振り返り、これからの決意を新たに益々活躍してほしいと期待するものです。

最後に、幾多の試練に耐え、輝かしい伝統を築いてこられたこの長岡工業高等専門学校が、これまで以上に自らの任務と使命に燃え、活躍されることを祈念いたしますとともに、創立五十周年を讃え、今後の更なる御発展をお祈り申し上げます。

祝 辞

技術協力会会長

山崎

彬

(越後製菓(株)代表取締役会長)

本学が開校した昭和三十年代は戦後の復興期で、衣食住のすべてが不自由な時代でした。中学校卒業で就職する子が多く、金の卵と呼ばれていました。地元での就職先は少なく、関東地方の大工場に集団就職で上京しました。地方都市は「産業を創ることこそ豊かな未来を約束する」と信じていました。第一期生が小学校に入学した頃は、靴もランドセルもなく、草履をはいて教科書を風呂敷に包んで通いました。昼食の弁当が用意できない家庭もあったため、程なくアメリカから支給されたメリケン粉（小麦粉）で作ったコッペパンと脱脂粉乳による学校給食が始まりました。粗末な給食でしたが、先生も生徒もみんなが平等で、楽しい昼食でした。どの家にも子供部屋などは無く、みんな暗くなるまで外で遊んで帰りました。これが「他人との協調性や我慢を養った」、との評は後の話で、友達と遊ぶ場所は外しか無かったのです。

ようやく三十年代半ばになると、洗濯機やテレビが少しずつ普及し、産業が芽生え始めたため、社会は技術者を求めましたが、まだ教育にお金をかけるのは大変な時代でした。その真つただ中に国立長岡工業高等専門学校が誕生したのです。国立で授業料が安く、寮もあり、高度な教育が受けられるということで、入学倍率は十数倍を超え、日本中から優秀な人材が集まりました。

人類の歴史を文明という観点でまとめたアーノルド・J・

トインビーの著作『歴史の研究（全三巻）』は、世界の思想書のベストセラーとなりましたが、その中で、「文明は、自然的環境や人間的環境に挑戦して、これをのり越えたときに生まれる」と言っています。最近遭遇した中越大地震や東日本大震災からは、未だに自然環境を克服することの難しさを知らされました。物質的に豊かになった近年は、人間が自ら作りだした負の環境、即ち原発事故、地球温暖化、食料不足、エネルギー危機、高齢化、宗教対立、富の格差など、新しく乗り越えなければならない課題がますます増加しています。最近長寿遺伝子の発見で、百二十歳まで見据えた社会体制が必要だといわれています。トインビーは、「理工学的な進歩による技術や創意は、豊かな才能を示しているが、政治や思想は遅々として進展していない」とも書いています。

今世紀の社会は、地球規模で各国の産業や経済が複雑に絡み合っています。本学の目指す高度な、技術・科学・工業を総合し、校歌に歌う「生みなさむ未来の世代」を実現するには、科学技術の探求と共に、地球人としての哲学・経済学・史学などの広い視野が求められています。開校以来すでに半世紀を数えました。在校生の皆さまは、これを機会に先輩の求めた「精詣にして厚き科学」を深く思索し、限りあるこの星に豊かな文明を確立してほしいと期待しています。

ご挨拶	校長 渡邊 和忠	10
祝辞	第六代校長 岡村 祥一／前校長 高田 孝次／同窓会長 伊藤 恒彦／平成二十二年後援会長 酒井 正春 技術協力会会長 山崎 彬（越後製菓㈱代表取締役会長）	18

長岡高専の春夏秋冬	10
空から見た長岡高専	18

長岡高専への熱きメッセージ	24
---------------	----

旧教職員	室橋 奨／斉藤俊郎／羽賀泰男／加藤才治／中澤 章／山口 肇／有本匡男／小林雅隆 廣川純夫／反町嘉夫／緒方和男／佐藤和秀／土田健一／辻 満男／金澤勝子／安達征子
同窓生	渡邊正則（電気3）／加藤健治（工化4）／松原 亨（機械6）／平野幸生（土木1）／山本大策（電気26） 高橋一男（制御1）／三膳陽子（工化29）／佐藤 壘（制御8）／スタルト（物質4）／佐藤翔輔（環境4） 内藤一真（機械39）／川上雄太（電電5年、平成23年学生会長）

長岡高専五十年の歩み	56
------------	----

●プロローグ	長岡における近代工業の発展と高等教育機関	国立長岡工業短期大学の誕生	高等専門学校制度の創設と歩み	64
●昭和三十六年度～昭和三十七年度【1966-1967】	長岡高専誕生―予想を超える入試倍率。仮校舎の日々、待たれる新校舎の完成。			64
●昭和三十八年度～昭和四十年【1963-1965】	「高志台」で教育活動がスタート。開学・開校記念式、竣工式の挙行。			66
●昭和四十一年度～昭和四十二年【1966-1967】	創立五周年を迎えて―第一回高志祭の開催と校歌発表。そして、第一回卒業式の挙行。			68
●昭和四十三年度～昭和四十五年【1968-1970】	土木工学科が増設され、四学科体制となる。揺れる学園、学生準則をめぐる紛争が発生。			70
●昭和四十六年度～昭和四十八年度【1971-1973】	学園紛争の果てに―新学生準則の制定と施行。新世代にいたえる理想的な学園の建設を目指して。			72
●昭和四十九年度～昭和五十二年【1974-1977】	新しい教育課程の実施―学生に「適切なゆとり」を。長岡技術科学大学の開学、全国高専中で最多の合格者。			74
●昭和五十三年度～昭和五十七年度【1978-1982】	創立二十周年記念講演会の実施。ノーベル化学賞受賞者・福井謙一氏と刀匠・天田昭次氏。			76



●昭和五十八年度～昭和六十一年度【1983-1986】 国際化時代の幕開け―マレーシアから本校初の留学生。創立二十五周年を記念して校旗を作成。……………	78
●昭和六十二年～平成三年【1987-1991】 昭和から平成へ―進展する情報化と国際化の中で。電子制御工学科の設置、黒龍江水利専科学校と学術交流協定。……………	80
●平成四年度～平成六年度【1992-1994】 学校新時代―週五日制の実施と推薦入試の導入。工業化学科を物質工学科に改組。……………	82
●平成七年度～平成九年度【1995-1997】 土木工学科を環境都市工学科に改組。全国高専体育大会で長岡旋風。……………	84
●平成十年度～平成十二年度【1998-2001】 ミレニアムの年に歴史を刻む―専攻科の発足とロボコン大賞の受賞。……………	86
●平成十三年度～平成十五年【2001-2003】 二十一世紀を迎えて―進む教育環境の整備と入試制度改革。……………	88
●平成十六年度～平成十七年度【2004-2005】 独法化元年、電気工学科は電気電子システム工学科に。中越地震の発生により、本校も大きな被害を受ける。……………	90
●平成十八年度～平成二十年【2006-2008】 五年間の準備期間を経て、JABEE認定を受ける。中越地震を乗り越えて―震災復興記念式典の挙行。……………	92
●平成二十一年度～平成二十三年【2009-2011】 創立五十周年を迎えて―大いなる未来に向かってはばたく長岡高専。……………	94
●エピローグ 思い出の写真でつづる学校生活のいま・むかし 思い出の写真でつづる寮生活のいま・むかし……………	94

長岡高専を支える各学科の歩み

- 一般教育科 ○機械工学科 ○電気電子システム工学科 ○電子制御工学科 ○物質工学科
- 環境都市工学科 ○専攻科

資料編

校章／校歌／標旗・校旗／ロゴマーク

歴代校長／歴代事務長・事務部長／歴代主事・専攻科長／歴代学生会長／歴代高志寮長／歴代清花寮長

編集後記

絵はがき